

3月5日に始まった大斎節も1ヶ月過ぎて、あと2週間になりました。次の日曜日には、イエス様が裁判を受け、十字架につけられて死ぬまでのことが、そのまま長い文章の福音書で読めます。そこで、その前の日曜日である今日は、その苦難の意味を考えるために、「ぶどう園と農夫のたとえ」が読まれることになっているようです。

このたとえ話は、イエス様の話された多くのたとえ話の中でも、そこに登場する人物たちが何を意味しているのか、一つ一つが実際のその社会の人たちに当てはまる、具体的なお話であることが特徴です。ぶどう園の主人は、神様のこと。農夫は律法学者や祭司長などのイスラエルの指導者。主人が遣わすしもべは預言者で、愛する息子はイエス様、というぐあいです。

そして、もうひとつの特徴として、このお話を聞くユダヤ人には、すぐに頭に浮かぶ旧約の物語がありました。イザヤ書5章に書かれている、「ぶどう畑の歌」というお話が根底にはあるのです。

神様は、イスラエルという国を、自分のぶどう畑のように大切に世話をしたことが書かれています。『わたしの愛する者は、肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り、良いぶどうが実るのを待った。』（1節後半から2節）ところが、そのぶどう畑にできたのは、酸っぱいぶどうだったので、神様はぶどう畑であるイスラエルを滅ぼしてしまった、という話です。

ですから、イエス様がここで主張したいことは、ハッキリしていて、最後には、『律法学者や祭司長たちはイエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたことに気づく』わけです。

しかし、先ずはお話自体を見てゆくことにしましょう。

「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た」という書き出しで話が始まります。

神様は、自分で大変苦労して作ったぶどう園を、農夫たちに託して、彼らがちゃんと管理し、おいしいぶどうが実るように、遠くから見守られたのです。

でも、ただ見守るだけでなく、そのぶどう園から、収穫の小作料を受け取ることができるような年数が過ぎると、だいたい5年ぐらい先だろうと思いますが、しもべを送りこみます。

このたとえでは、三人のしもべが送られていますが、農夫たちは、そのしもべたちを受け入れず、だんだんしもべに対する扱いがひどくなります。

最初は、袋だたきにするだけですが、二人目は、袋だたきにしたあと、侮辱します。三人目になると、傷を負わせてほうり出すということになります。そして、最後の愛する息子は、ぶどう園の外にほうり出して、殺してしまいます。

しかし、どうして、このぶどう園の主人は、次々としもべを派遣したのでしょうか？

これが今日の福音書の大切なポイントです。

ぶどう園の持ち主が、次々にしもべを送ったのは、ぶどうの収穫をすべて、残らず取り上げてしまうということではありません。ぶどう園とその施設は主人のものだということ。それを確認するために、収穫の一部を小作料として所有者に納入しなさいということを伝えるためでした。

これは、現在の法律の言葉で言えば、時効にかからないために、定期的にそれを農夫たちと確認して、持ち主の権利を主張する必要があった、ということだろうと思います。

これは、神様と人間の間での、世界はだれのものか、という問題を具体的に考えるための大切なたとえ話だと私は考えます。神様が世界を造られた時、明らかに、それは神様のものでした。そしてすべてのものの最後に人間を造って、世界を管理させたのです。ぶどう園に雇われた農夫のようなものでしょう。

ところが、神様からの小作料の取立てがなければ、時効にかかったようなものです。そうなれば、人間はこの世界をすべて、自分たちのものだ、と思い違いをしてしまうのです。

そのことは、主人が愛する息子を送った時の、農夫たちの言葉にハッキリと出ています。

『14:農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』』

神様は世界に次々と預言者たちを遣わして、この世界が神様の世界であって、自分勝手に使えるものではない、ということを教えられたのでした。それでも、理解しない人々に、最後はご自分の息子であるイエス様を送って、世界は神様のものであり、神様のぶどう園を人間の勝手にしてはいけない、と教えようとされたのでした。神様はここで『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』と言っています。

でも、その結果は、イエス様は殺されてしまうわけです。しかし、その死は、無駄死にではない、ということ、イエス様は、『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。』という詩編 118 編 22 節の言葉を引用して答えられました。

ぶどう園の主人は、戻ってきて、農夫たちを殺して、ぶどう園をほかの人たちに与える、というのです。これは何を意味しているのでしょうか。

イエス様を受け入れない、律法学者や祭司長たちがいるエルサレムが、ローマ人によって滅ぼされてしまう、ということを直接的には予告されている、ととれます。これを警告するお話として、当時は受け取ることもできたでしょう。

しかし、これは、聖書的には、世の終わり、最後の審判ということだろうと思うのです。

このお話を私たちの生活に当てはめてみましょう。

ぶどう園の主人が、定期的にしもべを遣わし、小作料を要求しているのは、たとえば私たちが毎月献金している、月約献金かもしれません。あるいは1週間に1度、日曜日には教会やそれができない場合は家庭で礼拝していることかもしれません。

これを通して、わたしたちは、自分たちの収入や、自分たちに与えられた時間が、すべて自分勝手に使えるものではなく、神様からいただいたものだから、神様に返すために、献金し礼拝を守る、ということなんだろうと思います。

これが、「ぶどう園と農夫」の話を通して、イエス様が語られたことの内実でしょう。

律法学者や祭司長は、神様に仕えている、と言いながら、実際のところは、神様を無視して、自分に与えられたものを、神様に返すのではなく、自分の自由にしてしまっている、それに対する皮肉が込められているのです。

私たちの中にそのような、律法学者や祭司長の要素はないか。

政治家たちが、国民のために働くために、税金の中から政党交付金という、政治家が国民のために働く活動資金があります。だからもう企業からの献金はもらわないようにしよう、という話がありましたが、その考えは無視されて、今や政党のために集めたお金も、一定を超えたら自分たちの勝手に仕える裏金になったことが批判の対象になりました。また、福島原発事故が大きな問題になったはずが、各地で原発再開のニュースなどを見ると、この世界が神様のつくられた良い世界だったのに、それを自分たちの都合のいいように使って、結局は自分で自分の首を絞めることになる。

そんなことが当たり前になってしまって、昨年1月1日に起こった能登半島地震から復興が進まないことなど考えると、神様が私たちのために世界を作って見守っていて下さる中で、預言者のような人々の多くの警告を無視し、犠牲者が出ても気にしないで生きていることに、反省を促されていることをつうかんするのです。

今年の年賀状の最後に、私が高校生の時に教えられた言葉を書きました。それは口語訳聖書の言葉だったのですが、6年前にできた、聖書協会共同訳で読んでみます。

『私たちは神の作品であって、神が前もって準備してくださった善い行いのために、キリスト・イエスにあって造られたからです。それは、私たちが善い行いをして歩むためです。』（エフェソの信徒への手紙2：10）

神様のみ旨を考えて、私たちは自発的に善い行いをして生きてゆきたいと思います。